

はじめに——ファティマ、フランス文学の新しい主人公

ラ・クールヌーヴ〔パリ北東セーヌ＝サン＝ドニ県の市。本小説の舞台〕の辻公園に集まるファティマと彼女の友だちは、フランスのシテ〔大規模団地群〕を舞台にした文学で最初の主人公である。

一家の母親であるファティマたちは一九八〇年には二十五歳から三十、四十歳ぐらいで、アルジェリアの平野部や山岳地帯の集落、南部や沿岸の小さな村からやってきた。彼女たちの多くが植民地時代に農村で生まれ、読み書きはできなかった。当時フランス人学校で教育を受けた女子はわずか五パーセントから七パーセント、女子はコーラン学校には行かないのが普通だった。フランスはイスラームを信仰する国ではない。フランス語は外国語。コンクリートに囲まれた日常生活の規則や決まりは彼女たちには馴染みがない。

彼女たちは自分の生きる土地をなくしてしまった。

自分の家にいる、みんなとくつろいでいっしょにいると感じられるのは、高層団地の棟と棟のはざまにある辻公園。そこは祖国の住まいにある中庭とおなじ。彼女らは心おきなくおしゃべりして、交わされる言葉は喜びから悲しみへと、笑いから暗黙の合意へと移りゆく。誰もがシテの暴力に、郷のしきたりとフランスの現代的な文化のぶつかり合いに直面する。祭りや儀式、信仰や死を異国の地で経験する。そして自分とは似て否なる「他者」も見出し、それを知りたがる。自ら望んでやって来たのではない異国の地を手なずけていくのだが、それは子どもたちのため、彼らが受け入れ国でよそ者にならないよう、彼らが自分たちの出どころであるムスリムという祖先を忘れないようにするためだった。

それからほぼ三十年経ったいま、シバニア〔白髪頭、老人を表すマグレブのアラビア語「シバニ」の女性形。シ〕と呼ばれるこの母親たち、そう、ラ・クルルヌーヴのファティマとその友だちは相変わらずシテにいる。子どもたちが生まれた場所に。母親たちはもう昔の伝統装束ハイクは身につけてはいないが（ある時期、頭をすっぽり隠す花柄のスカーフが取って替わった）、ヒジャブが話題になったアルジェリア内戦の時代、祖国とシテのイスラーム化の時代、イスラーム式スカーフ着用を擁護するため娘たちが兄弟に護られながらデモをした時代を経験した。そして二十一世紀の初めには、全身を黒い布で覆うニカブが登場する。

母親たちは穏便で簡明、広く流布した家庭内で行うイスラームを信仰していたが、娘たちは突如として宗教闘争の場に身を投じて母親たちを驚かせた。そして不安を抱かせた。けれど娘たちがみなヒジャブを身につけたわけではないし、勉強しに学校へも行けた。大学に行く娘もいたし、自分で職業を選択し、弁護士や教師、看護師、ジャーナリストにもなれた……娘たちはたいがい、忍耐がなく攻撃的な息子たちよりも熱心に学校で勉強した。母親たちはシテで息子たちが暴力をふるうのを知っている。警察の暴力も知っている（息子たちの場合は、しばしば刑務所が学校の代わりになった）。娘たちは教育と自由がもたらす恩恵、しつかり警戒して守るべき個人の権利を学び、望むのならフランス人に、そしてムスリムにもなれることを学んだ。父親や母親を否認せずに生きることを学んだのだ。

それがラ・クールヌーヴのファティマとその友だちが獲得したものである。

パリ、二〇一〇年

レイラ・セバル